

# ミステイルテイン

sasagani

## ミスティルテイン

オルタレイション・バーストー。

それは、生物が無数の平行宇宙を観測し、そこに住まう無数の自分を認識するという現象である。

一九九九年九月二十六日、このオルタレイション・バーストが全世界で同時多発的に起こり、観測した平行世界の自分から様々な可能性を引き寄せ、特異な能力を発現させた者達がいた。

人間を超越したその異能力を恐れた民衆は、人と人ならざる者との決別の意味を込め、彼らを異世界の扉を叩いた者――ノッカーズと呼んだ。

### 1

二〇一〇年三月、栃木県日光(にっこう)。

日光連山と呼ばれる連峰に、三郎山(さぶろうやま)という小さな山があった。

かつては豊かな植生を見せていた三郎山であったが、大戦後に起こった木材不足の影響を受け、主だった森林資源の大半が伐採され、それに代わって成長の早い杉を中心とする針葉樹が植えられた。

しかし、近年になり林業従事者が著(いちじる)しく減り、手入れも行き届かなくなりつつあったこの山を、武力をもって占領した組織があった。

夜の闇が漂う山の麓(ふもと)で、十人の男女が山頂へ続く道路を封鎖していた。みな一様に黒みがかかった迷彩服、暗視ゴーグルとガスマスクを身に着け、手には機関銃を構えている。

〔――準備は八割方まで進んだ。完了次第、作戦の実行に入る〕

連絡用無線から流暢(りゅうちょう)な英語が響く。山頂にいる組織の幹部からの通信だった。

「了解しました。こちらで現状のまま監視を続けます」

小隊を統率する男がそれに答える。

〔――異常はないか？〕

「はっ、今のところは何も」

もちろん、彼らが山を占拠したことはすでに知られている。行動を起こした早朝から昼にかけて、地元警察が二度の交渉を試みていたが、彼らはまともに取り合わなかった。

「島国の警察は腰抜けですね。二度目の交渉のときの威嚇(いかく)射撃から、こちらに近付こうともしません」

〔――そうか。ふむ、そろそろ奴が嗅(か)ぎつけて来る頃だと思ったのだがな〕

「奴……植物を操るあのノッカーズですか？」

小隊長が訊(たず)ねるが、幹部は黙(もく)して答えなかった。

相手の機嫌を損ねないよう、小隊長は細心の注意を払って言葉を発した。

「心配は無用かと。こちらは武装した構成員(もの)が三十人、それにあなた様もいらっしゃいます。いかにあいつといえど、これだけの武力を相手にしようとは思わないでしょう」

〔――……まあいい。だが、監視は怠(おこた)るなよ。奴が来(こ)ずとも、この国にはB O O T

S(ブーツ)とかいう対ノッカーズ装備を充実させた連中や、エレメンツ・ネットワークなどというシステムで情報を共有するノッカーズ達がいると聞く。そいつらがおかしな横槍を入れる可能性は大いにあるからな]

「了解しました」

幹部との通信が切れ、小隊長は緊張を解いた。

「ふう。敵と戦うよりも気を張るな」

小隊長は首元を緩(ゆる)め、ガスマスクをずらした。

「どうも鼻がむず痒(がゆ)いな。これが花粉症ってやつか。忌々しい人工林め」

杉林を見渡して顔を歪ませる小隊長に、部下が声をかける。

「マスクは外さないでください。命に関わりますよ！」

「あ、ああ」

作戦の要(かなめ)となる手段を思い出し、小隊長は慌ててマスクを掛け直そうとした。

その鼻に、不思議な香りが届いた。

「何だ、この匂いは……」

濃密な匂いだった。

まるで、周囲の林が放つ香りに夜気を混ぜ、凝(こ)り固めたような――そこで、小隊長は匂いを放つ者の正体を悟った。

「奴だ……奴が来たぞっ！」

マスクを掛ける暇も惜しみ、声を張って部下に異常を伝えた。

すぐさま機関銃を構えようとした隊員の一人に、闇の中から何本もの蔓(つる)が伸びて腕に絡みついた。

「ううっ……おまえは……」

蔓は腕を這(は)うようにして全身を覆っていく。

闇の中から人影が飛び出した。

銀の仮面とスーツを身に纏(まと)い、黒い髪をたなびかせる。

その両手には、二本の白く短い棒が握られていた。

「……ミスティルティン！」

その名を叫ぶ隊員の腹へと、人影は右手の棒を突き込んだ。

隊員が倒れるのを待たず、人影――ミスティルティンは次の獲物へと飛びかかっていった。

機関銃の音が散発的に響くが、夜の闇から次々と蔓が伸び、迫る弾丸からミスティルティンを守った。

「離れるな、固まれっ！」

隊長がようやく隊形を整えようとした頃には、十人の半数が昏倒させられていた。

「狙いを絞れ！」

五つの火線が収束し、蔓を砕いていく。ミスティルティンは新たな蔓を引き寄せるが、破壊の勢いはそれに勝っていた。

「いける、いけるぞっ！」

小隊長が混乱の中に希望を見出したのは、しかし一瞬のことだった。

「む……何だ、鼻が……びえっくしゅんっ！」

おもむろに鼻の痒みが強まり、くしゃみが止まらなくなる。

「びえっくしゅ！ これは、花粉——びえええっくしゅっ！」

それは花粉症の症状だった。急激なアレルギー反応により自律神経が失調し、小隊長は立って  
いられなくなった。

「小隊長っ？」

「か、構うな。撃ち続ける！」

うずくまりながら出した指示に従い、無事な四人は敵への攻撃を続けた。

ミスティルティンはわずかに後退し、林の間を縫うようにして動き回った。

小隊長はその隙にマスクを被るが、症状はすぐには収まらない。

(か、花粉とは、小賢しい手を……)

くしゃみをこらえながら、小隊長は相手の思考を読もうとした。

(しかし、あいつは何度も我が組織と交戦してきた。こちらに防毒装備があることはわかっているはずだ……)

そこで、風もないのに林がざわめいた。

木々の中から大量の虫が飛び出し、五人へと向かってくる。

「何っ、ミスティルティンが虫を操るだと？ そんな話は聞いていないぞ——」

果たしてその読みは外れていた。

虫の群はミスティルティンが隠れた場所から湧いていたが、五人を狙って出てきたのではなかった。

「違う、操られているんじゃない。これは……逃げているのか！」

フィトンチッドという言葉が浮かぶ。それは、植物が外敵を遠ざけるために放つ天然の化学物質であり、また人間の精神を鎮静化させる効果もあるといわれているものだった。

「そうか、フィトンチッドを使って——」

気付いたときには遅かった。

虫の発生により銃撃が止んだ隙を突いて、ミスティルティンが飛び出した。

その黒髪に、淡い緑色の光が灯っている。

ミスティルティンは駆けながら、両手の白い棒の先を合わせた。よく見ると、片方にはネジが、もう片方にはネジ穴が付いていた。両手の棒をくるりと回すと、短い二本が一本の長い棒——警杖(けいじょう)となった。

「神道(しんとう)夢想(むそう)流——間縫(まぬい)」

ミスティルティンは呟くと、狼狽(ろうばい)しつつ再び引き金に指をかける隊員達の中へ飛び込み、警杖を振るって瞬く間に四人を倒してしまった。

「きさまっ！」

一人残された小隊長が腰からアーミーナイフを引き抜こうとするが、それより早く杖がうねり、手首をしたたかに打つ。

「ううっ」

手を押さえる小隊長の喉元に、杖の先が突きつけられる。

「リゲイン・フローラスの者だな。他の連中はどこにいる？」

「教えるものか……」

最後の意地を見せようとする小隊長の胸で、無線機のスピーカーが震える。

「――よく来たね、ミスティルテイン」

響いたのは、幹部の声だった。

「――いや、ここは旧交を温めるため、あえて本名で呼んだ方がいいかな。ヒノキ・アスナ」

それを聞き、ミスティルテインは銀の仮面の下で顔を歪ませた。

「ザ・トレント……やはりきさまか」

「――おいおい。そんな野暮な呼び方はよしてくれ。私のことも、昔のようにレイダーと呼んでくれないかい、ヒノキ」

ミスティルテインは幹部――ザ・トレントの言葉を無視した。

「ザ・トレントよ。おまえは今、どこにいる？」

「――ふっ、相変わらずつれない男だな。私はこの山の頂上近くにいるよ。これだけ言えばわかるだろう？ ……さて、こちらの準備は万端だ。もうすぐ盛大なパーティが始まるが、君は間に合うかな？」

ザ・トレントはくつつつと含み笑いを漏らす。

ミスティルテインは杖を構え、無線機を一突きした。

機械を粉々に壊し、さらには小隊長を失神させ、ミスティルテインは三郎山の頂きを見上げた

。鬱蒼(うっそう)と茂る木々の中に、巨大な建造物があった。

「ダムか……何を企んでいる、ザ・トレント」

眩きに応じるかのように、ダムから水の壁が立ち上(のぼ)る。壁はそのまま波となって外へと飛び出し、針葉樹の森を呑み込んだ。

「くっ、一刻の猶予(ゆうよ)もないな」

ミスティルテインは山道を駆け出した。

通り過ぎた後に、緑色の光の軌跡を残しながら――。

## ミスティルティン 2

2

「何だと……」

三郎山ダムの近くに辿(たど)り着き、ミスティルティンは愕然とした。

「木が……森が、枯れている……」

生い茂る木々は、完全に生気を失っていた。春を迎えて開いたばかりの葉は全て色褪(あ)せ、はらはらと落ちていく。枝も幹も石と化したように乾き、指先が触れただけで音を立てて崩れさってしまった。足元の泥濘(ぬかるみ)から、それが先ほど見た波によるものだと判じることができた。

「これは――まさか！」

ミスティルティンが鋭い視線を上に向けると、ダムの縁(へり)に一人の男が立っていた。

タキシードを着た、背の高い白人男性だった。

まるでオーケストラの指揮者のように、男が優雅に両腕を振るう。すると、その動きに合わせて貯(たくわ)えられた水が持ち上がり、巨大な水の壁となった。

「くくく。第二波といこう」

男は右手を掲げて壁を維持しながら、左手を懐(懐)に差し入れる。取り出したのは、青い小瓶(こびん)だった。

親指で小瓶の蓋(ふた)を開こうとしたそのとき――

「そこまでだ、ザ・トレント！」

声と共に蔓(むち)の鞭(むち)が走り、男の左手首に絡みついた。

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ、ヒノキ・アスナ」

男――ザ・トレントは蔓(むち)を意(い)に介(か)さず、笑(わ)みを浮かべたままミスティルティンを見やった。

「きさまの狙(ねら)いが読(よ)めたぞ。その瓶(びん)に入(い)っている毒(どく)を使い、この山(やま)を枯死(こし)させようとしているのだな」

ミスティルティンは蔓(むち)の鞭(むち)を引きながら言う。

「まあ、そんなところだ。ただの毒(どく)ではないがな」

ザ・トレントが右手の指(ゆび)をぱちりと鳴(な)らす。すると、維持(維持)していた壁(かべ)が波(なみ)となり、ミスティルティンへと襲(襲)いかかった

。

これが彼のノッカーズとしての能力――〈激流(げきりゅう)(ザ・トレント)〉たる所以(ゆえん)であった。

「ちいっ」

ミスティルティンはとっさに蔓(むち)から手を離(はな)し、白(しろ)い警杖(けいじょう)を取り出した。

「いええええいっ！」

意気(い気)を発(は)し、警杖(けいじょう)を一(いっ)振りすると、迫(せま)る大波(おほなみ)が縦(たて)一文字(いちもんじ)に両断(りょうだん)された。

「さすがだな。神道(しんどう)夢想(むそう)流杖術(りゅうじょうじゆつ)――免許(めんぎょ)皆伝(みなでん)の腕前(わんぜん)は衰(おとろ)えてはいないか」

攻撃(こうげき)を破(やぶ)られたにも関わ(か)らず、ザ・トレントはまだ泰然(たいぜん)と構(かま)えていた。手首(てくび)の蔓(むち)をほどくと、即座(すく)に水(みづ)へと意識(いしき)を向(む)ける。波(なみ)ではない。水(みづ)が逆巻(さかまき)き、太(お)い柱(はしら)となった。

「どのような手(て)を使(つか)おうとも――」

言(い)いかけて、ミスティルティンは顔色(かおいろ)を変(か)えた。

ザ・トレントの持(も)つ青(あお)い小瓶(こびん)の蓋(ふた)が、開(あ)かれていたのである。

「ほう。それはこんな手(て)でも、かな？」

手懐(てなず)けられた獣(けもの)のように、水柱(みづはしら)がその足元(あしもと)にかしずいた。

「やめろっ！」

ミスティルティンが叫(こ)ぶ。

ザ・トレントは、それを心地(こころ)よい調べ(しらべ)として聞(き)きながら、小瓶(こびん)を水柱(みづはしら)へと傾(かたむ)けた。内容液(りようえき)が三滴(さんてつ)垂(た)らされるや、水柱(みづはしら)は液(えき)と同じ毒々(どくどく)しい青(あお)へと変(か)色(しき)した。

「その毒(どく)……枯葉剤(かれはざい)(かれはざい)だな」

「そうさ。その名(な)も〈エージェント・コバルト〉――」

「エージェント、だと？」

ミスティルテインに思い当たる物があった。自分が生まれるより前の戦争で使われた、〈エージェント・レインボウ〉という七色の毒である。

「さて、第二楽章を奏(かな)でるとしよう。この私が作った交響曲〈激流〉のな。存分に踊ってくれよ、ヒノキ・アスナ」

ザ・トレントの腕に促(うなが)されるように、青い水柱が迸(ほとばし)る。

「くっ、夢想流——衝門(しょうもん)っ！」

ミスティルテインは警杖をねじり込むようにして突き出した。水柱は貫かれ、その強烈な回転力により四方へと散(さん)じる。毒は、一滴たりともその体に届いてはいなかった。

「しまった！」

声を上げたのは、攻撃を凌(しの)いだはずのミスティルテインだった。

突きにより散らされた水飛沫(みずしぶき)が、ダムを取り巻く林へと飛んでいく。青葉が見る間に色褪せ、幹が音を立てて崩れていった。

「ふふふ、悔やむことはない。避けたとしても同じ結果、おまえに選択肢はなかったのだ。己の命を守るのが最善の行動よ。しかし……正義のヒーローとしてはいかなものかな？」

ザ・トレントはいやらしい笑いを漏らす。

「外道め……」

ミスティルテインはぎりりと歯を噛み合わせた。

枯葉剤は植物を枯死させるだけでなく、人体にも尋常ではない悪影響を及ぼす。それは何世代にも受け継がれる呪いの如き毒であった。

「……だが、〈エージェント・レインボウ〉の七色にコバルトは含まれていない。もしやその毒、ノッカーズ能力か？」

「そうだと。毒の調合能力を持つノッカーズに協力を願ったのだ」

「R・F(リゲイン・フローラス)には、そのような能力を持った者はいないはず——きさま、無関係のノッカーズを脅したのか」

「人間きの悪いことを言うなよ、ヒノキ。あくまで紳士的な態度で協力を乞(こ)うたのさ」

ザ・トレントが属するR・F(リゲイン・フローラス)は、表向きには環境保全を謳(うた)う団体だが、その実態は目的のためには手段を選ばないテロ組織である。そのような連中が口にする紳士的な態度の内容が推(お)して知るべきものであることを、ミスティルテインは身をもって理解していた。

「〈エージェント・コバルト〉は試作品でね。これまでの枯葉剤の十数倍の威力がある反面、質量が大きくてな。空気中への散布ではさほどの効果が望めない——そこで、私の出番というわけさ」

「だから、この三郎山ダムを選んだのか……」

ザ・トレントのノッカーズ能力は、水を操るというものである。彼は一万トンもの水を自在に操ることができるが、自身で水そのものを生み出すことはできなかった。

「理由はそれだけではないよ。我がR・F(リゲイン・フローラス)の本質を忘れていやしないかね？」

R・F(リゲイン・フローラス)は自然に形成された植物環境の保持を第一と考え、活動を展開していた。

「天然植物相至上主義(N. F. S. P.)——そうか、この山の多くが植樹された杉林。それを文字通り根こそぎにしよというのか」

「くくく。花粉症がなくなると聞いて、この国の人間のどれだけが喜ぶと思う？ その上、無用の長物である杉林をさっぱりと消してやろうというのだ。感謝されこそすれ、責められるいわれはないぞ」

「猛毒を使っておいて何を言うか。山に宿る命は木々だけではない。鳥や獣、虫だっているのだぞ！」

「おいおい。我らにとって、鳥獣や虫けらなど二の次だよ、ヒノキよ」

この原理主義的な思想とそれに基づいた過激な活動こそが、R・F(リゲイン・フローラス)が環境テロ組織と見なされている理由であった。

「思い出したよ、ザ・トレント。きさまらが話して通じる相手ではないということな」

「言ってくれるではないか」

ザ・トレントが新たな水柱を作り出そうと右手を上げる。

そうはさせじとミスティルテインが飛び出した。

黒髪に緑の光が浮かぶ――が、すぐに明滅し、かぼそい残滓(ざんし)を散らして消えてしまった。

「何っ？」

ミスティルティンは駆けながら驚愕した。

「フィット・アクティブーションだったか？ その力は意味を成さない。何せ、力の元が失われているのだからな」

ミスティルティンの真骨頂であるフィット・アクティブーションは、木々のカーフイットンチッドを利用して心身を活性化させるものだった。つまり、〈エージェント・コバルト〉によりその木々が枯死している中では、その力は発揮できないのである。

「構うものか、おまえを倒せばっ！」

ミスティルティンは白い警杖(つえ)を突き出そうとした。

しかし、フィット・アクティブーションによる加速はない。

「遅いよ、ヒノキ。遅過ぎる」

突きが届くより早く、ザ・トレントは水柱を作り上げていた。

「うおおっ！」

突きと激流がぶつかった。

先ほどと同様に、突きの衝撃が水を弾いていく。

「フィット・アクティブーションなしでそれだけの力を出すとはな。だが、こちらにはこれがある」

ザ・トレントは〈エージェント・コバルト〉を数滴、水柱に注(そそ)ぎ込んだ。水を操る力と反応し、水柱のところどころから青い棘(とげ)が突き出す。

「そうそう。この間、おまえの記事が載っていた雑誌を読んだんだ。週刊デイライト、とか言ったかな。我がR・F(リゲイン・フローラス)の話がほとんど出なかった点は少々いただけないが、あの話はまあ面白かったぞ」

激流の勢いが増し、突きを押し返す。

「うぐうううううっ！」

苦悶の表情で何度も突きを放つミスティルティンに、ザ・トレントは語り続けた。

「そう、おまえの先生とやらの話だ。人としての生を奪われたのではなく、人を救うために力を与えられた――至言(しげん)ではないか。きっと、愛弟子(まなでし)がその言葉に殉(じゅん)じても惜しくはないのだろうな、ふふふ」

一瞬の均衡(きんこう)――

ミスティルティンはとうとう力負けし、水柱に呑み込まれた。

「うわあああああああぁっ！」

押し流され、ダムから落下する。

その最中(さなか)、まるで走馬灯のようにミスティルティンの脳裡(のうり)をよぎるものがあった。

それは、手に余る力を得た己に道を示してくれた者の姿だった。

「先生……」

恩師の影に縋(すが)るように手を伸ばしながら、ミスティルティンは遙か地表へと落ちていった。



〈【月イチ企画 ヒーローインタビュー第十四回】 緑の戦士の正体に迫る！〉

聞き手・構成 三ノ輪(みのわ)涼子(りょうこ)

――ヒーローインタビューも大好評の内に十四回目を数えました。今回は二〇一〇年に突如現れた謎のヒーロー、緑の戦士ミスティルテインさんに直撃していきたいと思います。

「お手柔らかにお願いします(笑)」

――では早速。まず、そのお名前の由来を聞かせてください。

「ええと、北欧の古代語で宿(やど)り木(ぎ)を意味する言葉……だそうです」

――こちらの調べたところによりますと、古代北欧の英雄が亡霊の王と戦って得た伝説の剣の名ですね。それと、北欧神話において悪神ロキが宿り木を用いて光の神バルドルを殺し、最終戦争を引き起こすきっかけを作った、と。この名前はご自分で付けられたのですか？

「いいえ、神話に疎(うと)い私にはとても考えつきません(苦笑)。北欧に住む知人が名付け親です。このマスクとスーツもその人が作ってくれました」

――ということは、ミスティルテインさんは北欧にゆかりがおりなのですね。

「ええっと……まあ、そうですね」

――情報によると、北欧最古の歴史を誇るウプサラ大学に留学なさっていたことがあるとか。ウプサラ大学といえば、分類学の父と呼ばれたカール・フォン・リンネが植物学の教鞭を取っていたことで有名ですよ。街にはすばらしい植物標本と庭園があるリンネ博物館もある。やはり、そこが緑の戦士誕生の地なのでしょう？

「おっと、その質問の答えは濁(にご)させてもらいます。しかし、驚きました。デイライトの三ノ輪さんは地獄耳だという噂は本当だったんですね(笑)」

――お褒(ほ)めいただき恐縮です。初対面ということもありますし、深くは追求しないことにしますが、読者の皆様にはミスティルテインさんが物腰穏やかで知性と教養に溢れている方だということをお伝えしておきます(笑)。では方策を変えまして、ミスティルテインさんが主に戦ってらっしゃるリゲイン・フロラス(以下R・F)について伺いたのですが？

「はい。R・Fは、有(あ)り体(てい)に言ってしまうと環境テロ組織です。天然植物相至上主義(以下N・F・S・P。)――つまり天然の植生のみが本来の地球の緑であり、あらゆる人工林や農業を否定するという思想に基づいて活動を行っています」

――N・F・S・P.は原理主義的な思想で、R・Fはそれを達成するためには手段を選ばないことで有名ですね。

「彼らは武力を使うことを躊躇(ちゅうちょ)しません。銃器などの武装をしているのは当たり前で、さらにはその構成員にはノッカーズ能力者も数多くいます」

――手元の資料にも、R・Fの活動は一九九九年のオルタレイション・バースト(以下O・B)以後に活発化したとあります。やはり、社会に受け入れられなかったノッカーズの受け皿となっているのでしょうか。

「それもあります。中には享楽(きょうらく)的にその能力を反社会的行動に向けている者もいます」

――話を戻すようで申し訳ないのですが、ミスティルテインさんがR・Fと最初に接触なされたのは北欧だとか。

「ええ、そうです」

――そのときのことを教えてくださいませんか？

「細かい話は省かせてもらいますが、彼らは北欧に滞在していた私のノッカーズ能力――植物を操る力を知り、同志として組織に引き入れようと接触してきたのです」

――そして、手段を選ばぬその卑劣なやり口に義憤(ぎふん)を覚え、敵対するようになったのですね。

「そこまで格好の良いものではありませんが(苦笑)、概(おおむ)ねそのような感じです」

――R・Fはあなたのノッカーズ能力に気付いたと仰いましたが、ということは、ミスティルテインさんの能力はやはりO・Bによって発現したものなのですね。

「(頷(うなず)きながら)その話なら、してもいいかもしれませんね。折角の取材を無駄足にさせるのも何です(笑)」

—ありがとうございます（笑）。是非お聞かせください。

「当時中学生だった私は、秋の林間学校でO・Bを体験し、平行宇宙での自分の可能性を観測しました。植物を扱う力を得たのは、幼い頃から草木や花に興味を持っていたからだと思います」

—初めてノッカーズ能力を手にしたとき、どのようなことを思われましたか？

「何かを考える余裕はありませんでした。ご多分に漏れず、というのでしょうか。やはり力を持て余し、山一つを鬱蒼とした原生林に変えてしまいました。そう—暴走、ですね」

—心中お察しします。その後はどうなされたのですか？

「力を使い果たして気を失ったところを警察に保護され、そのまま様々な施設を転々としました」

—当時はBOOTSもなく、ノッカーズへの対策は全くなされていませんでしたものね。

「はい。結局は東京郊外に急拵(ごしら)えで設けられた特別少年監察院に入所することになりました」

—〈スクール〉と呼ばれた施設ですね。答えづらい質問かとは思いますが、ご両親はノッカーズ能力を得たあなたとどのように接されたのですか？

「両親とは、保護された直後に一度会っただけです。手紙は何通か届きましたが、面会に来てはくれませんでした」

—そうですか.....。

「気になさらないでください。突然のことで両親も驚いていたのでしょう。それに、今では普通に会って話もできるようになりましたし」

—それを聞いて安心しました。ご両親も、ノッカーズも自分と変わらない人間であることを理解なされたのですね。

「いや.....両親の気持ちよりも、一番の障害となったのは私自身の心の問題ですね」

—と、仰いますと？

「自分で言うのも何なのですが、その頃の私は思春期というやつで。両親に裏切られたと思い込み、また、たらい回しにするだけで何の解決策も示さない施設の職員を逆恨みして、大人への不信感を日々募(つ)のらせていったのです」

—それは当然のことだと思います。私が同じ立場でも、そのように考えたでしょう。

「ありがとうございます。しかし、〈スクール〉に入ったときの私は不信の塊(かたまり)で、反抗的な行動ばかり取って職員を困らせる問題児となっていました。もちろん単なる問題児ではなく、ノッカーズ能力を振るう恐ろしい存在でした」

—今のお姿からはとても想像できませんね。その恐るべき問題児が更生したきっかけは何だったのでしょうか？

「ある人物が、私を救ってくれたのです」

—ある人物.....その方もノッカーズだったのですか？

「いいえ、普通の人間でした。ですが、ノッカーズとはまた違う、不思議な力と空気を持ってらっしゃいました」

—どのような出会いでしたか？

「あれは—そう、同級生とちょっとした諍(いさか)いを起こし、私が〈スクール〉の一角をジャングルのように変えてしまったときのことです。私はジャングルの奥で木の檻(おり)を作り、外との関係を遮断しました。〈スクール〉で栽培されていた野菜や果実を口に、ひと月以上も閉じこもりました」

—それはすごい引きこもりですね（笑）。

「冗談抜きではた迷惑な話です。未だに申し訳ないことをしたと深く反省しています」

—そこに、ミスティルティンさんに転機をもたらす人物が現れたのですね。

「そうです。あの人—ここでは仮に先生と呼ばせてもらいますね。五日ほど経ったある日、先生はふらりとジャングルに現れました。人を入れないように茂らせた木々の間を、まるで散歩でもするかのように進んでくるのです。時折聞こえてくるこつこつという木を叩く音から、私はそれが何かしらのノッカーズ能力だと思い込み、攻撃をしかけました」

—でも、その先生は普通の人間だったのですよね。

「はい。さらに、そのときの私は力を出すことはできても手加減はできませんでした。普通なら大怪我をするほどの攻撃でしたが、先生はそれをするすとかわし、迷うことなく私がこもった檻へとやって来たのです。驚く私に、檻の向こうから声かけられました」

—何と言われたのですか？

「私の名を確かめ、『大丈夫、心配ないよ』と。しかし、私は頑(かたく)かにその言葉を信じず、声が届かないほど檻を厚くしました。そのまま一人で消えてしまおう、そう考えたとき、音もなく檻に裂け目が生じ、真っ二つに割れたのです」

」

——裂けた……刃物か何かを使ったのでしょうか？

「いいえ。先生が手に持っていたのは、木製の杖だけでした。そのときの先生の姿は今もこの目に焼きついています。三十代くらいの細身の男性で、顔にはサングラスをかけていました」

——サングラス？ まさか、その方は……。

「（頷きながら）先生は全盲(ぜんもう)——視覚障害を持ってらっしゃいました」

——なるほど、だから杖で木を叩いて進んでいたのですね。けれど、どうやって檻を断ち切ったのでしょうか？

「私も同じ質問を投げかけました。すると先生は、穏やかに笑いながら、『これは僕の必殺技なのさ』——と。私はその不思議な魅力に興味を抱き、対面するように腰を下ろした先生が口にする言葉に耳を傾けたのです」

——先生は、どのようなことをあなたに語られたのですか？

「好物は何か、音楽は聴くかといった至極(しごく)他愛もない話です。興味を抱いたものの警戒心はまだ解けず、私は無言で首を縦か横に振ってその話に応じました」

——その内に、心のわだかまりが解けていったのですね。

「すぐに、という訳にはいきませんでした（苦笑）。そのようなやり取りで一日目は終わり、先生は『また明日』と言い残してジャングルから出て行かれました。穏やかなその人柄に魅了され、私はそれ以後檻を作らず、先生の来訪を心待ちにするようになったのです」

——それからひと月、先生との対話が続いたのですね。

「はい。短い間でしたが、私は先生から大切なことを教わりました。おっと、そろそろ時間もなくなってきましたね（笑）」

——（時計を確かめ）あっ、申し訳ありません。興味深いお話なので、時間を忘れて聞き入ってしまいました。では、かいつまんでお聞かせ願いますでしょうか？

「わかりました（笑）。先生から教わったのは、二つのことです。一つは、心の鬱憤(うっぷん)は溜め込まず、体を動かして発散しろ、と。先生は盲目ながら、杖——警杖(けいじょう)という道具を駆使する武術の使い手でした」

——ミスティルテインさんもお使いになられる、神道夢想流杖術ですね。

「ええ。先生はその道の達人で、私用の警杖を用意して手ほどきをしてくださいました。未だにその鍛錬は怠(おこた)ってはいませんが、まだまだ先生の足元にも及びません」

——またまたご謙遜を。R・Fをはじめとする数々の凶悪ノッカーズを決して殺さず、懲(こ)らしてきたのは周知の事実ですよ（笑）。

「いいえ。懲らすことはできても、彼らの心根を正すことはできていません。未熟の極みです」

——並々ならぬ向上心ですね。尊敬の気持ちが一層強まりました（笑）。では、先生から受けたもう一つの教えとは何でしょうか？

「それは……力をどう捉(とら)えるか、ということです。先生との対話のお陰で大人への不信感は薄らぎましたが、その根幹にある——己に背負わされた大きな力への恐怖は拭(ぬぐ)い切れていませんでした。先生はそんな私の心を察され、ご自分の来(こ)し方(かた)について語ってくださいました。生まれながらにして光がなく、正しく暗黒の中を手探りで進んで来られたその道筋に、沈んだ私の心は大きく勇気づけられたのです」

——ノッカーズ能力により普通の人間としての人生を失ったご自身と、光を奪われた先生の身の上が重なるように思えたのですね。

「そうですね。ただし、先生はこう仰いました——『奪われたと考えてはいけません。そういった負の感情は力になることもあるが、それは一時のこと。そのような力に頼り続ければ、遠からず身を滅ぼすことになる。だから君も、人としての生を奪われたと思うのではなく、人を救うための力を与えられた、と考えたらどうだい』——と」

——なるほど。つまり、現状を後ろ向きに考えるのではなく、前向きになれということですね。最後の「どうだい」にお人柄が現れていますね（笑）。

「とても面白く、そして優しい人でした（笑）。『僕は光の代わりにたくさんのものを手に入れた。耳は人の数倍の音を聴き分けられるし、皮膚の感覚や嗅覚も鋭敏になった。そして護る術(すべ)——自分の身だけでなく、大切な人を護る手段も身に着けることができたんだ』——そう語り、愛用していた警杖を触らせてくれました。それはただの杖ではなく、千年杉という神木で作られた特別な物で、軽く触れただけで気持ちがすっと落ち着いたのでした」

――そして、ミスティルテインさんをご自身のノッカーズ能力を肯定的に受け入れるようになったのですね。

「はい。そしてひと月が過ぎ、その二つの教えを残して先生は私の前から去ってしまわれました。特別な言葉はありませんでしたが、最後となる日の別れの際に、いつものような『また明日』ではなく、『またいつか』と……」

――その後、先生とは？

「あれから十年経ちますが、一度も会っていません」

――捜そうとはなさらなかったのですか？

「そう思ったこともあります。行動に移しはしませんでした。先生が去られたのは、頼まれた役目――つまり迷った私に道を示す役目を果たされたからだと考えたのです。ですが、それも一つの縁(えん)。私が先生の教えを守り続けていれば、新たな縁が私達を引き合わせてくれる、そう信じています」

――それがより良き出会いとなることを、私も陰ながら祈らせていただきます。

「ありがとうございます」

――こちらこそ、長時間お付き合いいただきありがとうございました。緑の戦士ミスティルテインさんにエールを送りつつ、今回のインタビューはここまでとさせていただきます。さて、次回は南の地、福岡で大活躍の青(シイ)ノ七(なな)のみなさんへ突撃したいと思います。乞うご期待！

## ミスティルティン4

4

自由落下の中、ミスティルティンは夜空に手を伸ばした。

「……こ、ここまでか……………」

植物の力を得ることも叶わず、武器も破壊された。ザ・トレントの攻撃をまともに受け、その上〈エージェント・コバルト〉なる毒を大量に浴びた。ミスティルティンの気力は尽き、その命の灯火も消えかけていた。

「せんせい……すいません……………」

ミスティルティンの意識が薄れる。高さ百メートルに及ぶダムから落ちては、さしもの緑の戦士といえども命はない。

地表まであと三十メートルというところで、ダムの壁面から影が跳び、力を失ったミスティルティンに重なった。

怪鳥(けちょう)の如くマントをはためかせながら、影は空中で両手を伸ばしてミスティルティンの体を抱き止めた。

と思うや、背から布のような物が二つ伸びた。布の先端が手のように変形し、その指先をダムの壁に食い込ませる。

二つの手ががりがり壁を削り、摩擦により落下の速度を減少させていく。

たん、と軽い音を立て、影が地面に降り立つ。背から伸びた二本の手は布のような形状に戻り、ひらひらと垂れ下がった。

「わ、渡辺(わたなべ)……先生……………」

かすれる視界の中、ミスティルティンはおぼろげに見える影を大恩ある師と重ね合わせた。

「違います」

影はにべもなく否定した。

月光がその姿を照らす。その声と体型からして青年であることに間違いはないが、その頭は左右非対象の仮面に覆い隠されていた。

仮面の左半分に装着された半月のような部品(パーツ)の中央で、小さなレンズが収縮した。

[ミスティルティン——阿砂(あすな)檜(ひのき)であることを確認。呼吸、心拍共に著しく弱まっています。激しい打撲に加え、未知の毒物に侵されていることが原因と見られます]

ミスティルティンの体を走査(スキャン)した結果を、電子音声伝える。

「〈エージェント・コバルト〉ですね。ノッカーズ能力を用いて生成された枯葉剤——」

呟くと、影はミスティルティンの身を地に横たえた。

[いかがいたしますか、マスター。このままでは、いかにミスティルティンといえども命に関わります]

「心配はありませんよ、スパークィ。このようなこともあろうかと、あの方に声をかけておきましたから」

影は腕を組み、麓の方へと顔を向けた。

そこには、小さな青い炎が灯っていた。炎は見る間に大きくなる——否、麓からダムへと近付いていた。

ただの炎ではなかった。それは青く燃える髪。不浄(ふじょう)を許さぬ正義の炎髪(えんぱつ)の持ち主は、影に近い年頃の青年である。仮面こそ着けてはいないものの、また異なった奇怪な容貌をしていた。

首には同じく燃えるマフラー。バンダナを巻いた額の前で、握り拳ほどの大きさの光の輪(リング)が浮かんでいた。

それだけではない。左腕が——異様なまでに巨大だった。上半身を覆うほどの巨腕の掌(てのひら)には、目を象(かたど)ったと思(おぼ)しき紋様が浮かんでいた。

[——レイズマン・ゼロ]

電子音声——スパークィがその名を告げる。

「おおい、アルクベイン！」

影の元に着くなり、レイズマンは申し訳なさそうに燃える頭を掻いた。

「遅くなってすまん」

「気にはしていません。あなたの遅刻癖(ぐせ)はいつものことですから」

アルクベインと呼ばれた影は淡々と言う。

「おまっ、そりゃねえだろ。これでも全速力で来たんだぜ」

唾(つば)を飛ばす勢いで抗弁するレイズマンを、アルクベインは右手を出して留めた。

「あなたを責めているわけではありません。遅れたのは、私も同じ——というより、そもそも独断専行した彼が悪いのです

」

アルクベインは横たわるミスティルティンに目をやった。

「こいつが、近頃噂の緑の戦士か」

「ええ。ミスティルティン——植物を操るノッカーズです」

「知ってるぜ。こないだの週刊デイライトの特集記事を読んだからな。んで、どうしてこんなひどい状態になっちゃったんだ？」

「詳しい話をしている暇はありません。彼は今、強力な毒物にその身を冒(おか)されています。それをあなたの力で——

」

その言葉を遮るように、また意趣(いしゅ)返しとばかりに、レイズマンはアルクベインに向けて右手を上げた。

「わかったわかった、みなまで言うな。んじゃ、とっととやっちゃうか」

そう言うと、レイズマンはミスティルティンの傍(そば)に片膝を着き、その上に巨大な左腕を開いた。

「待ってください、レイズマン。ゼロフィストでは力が強過ぎます」

電子音声が注意を促す。

「わーってるって、スパークィ。おまえさんの心配性は、気難しい御主人様のせいだろうな」

困惑げにレンズを収縮させるスパークィを見て朗らかに笑いながら、レイズマンは左の袖を捲(まく)るような仕草を取った。

すると、巨腕——ゼロフィストが外れ、レイズマン本来の左腕が露(あら)わとなった。

「——いくぜ」

眼差しを引き締めると、青い炎の髪が逆立ち、左目で小さな爆発が起こる。

「毒だ……毒だけを……」

精神を極限まで集中させ、燃える左目でミスティルティンを蝕む〈エージェント・コバルト〉だけを選別していく。

「分解、するっ——！」

左手から発された力が、見る間に〈エージェント・コバルト〉を無力化していく。

全ての毒が除去されたことを確かめ、レイズマンは力を止めた。

「……ふうっ」

息を吐き、額の汗を拭うレイズマンに、アルクベインが声をかける。

「原子レベルでの分解——腕を上げましたね、レイズマン・ゼロ」

「へっ。この力の使い方を教えてくれたのはあんただろ、アルク」

「そうでしたね」

にかりと笑うレイズマンを見て、鉄面皮と思われたアルクベインも仮面の下で微笑した。

「……う、うう……………」

ミスティルティンがうめき、身じろぎをした。

「おっ。奴(やつこ)さん、気が付いたみたいだぜ。なかなかの回復力だな」

レイズマンが肩を貸し、ミスティルティンの上半身を起こした。

「あ、あなた達は……レイズマン、それにアルクベイン……」

「おう！ はじめまして、だな」

レイズマンはにこりと笑いかけた。

初対面であったが、二人とも十年以上のキャリアを持つ先達であり、ミスティルティンもちろんその存在を知っていた。

「私を、助けてくれたのですね……」

そう言って、ミスティルティンはうつむいた。安堵(あんど)したのではない。無様な己に落胆したのである。

アルクベインはそれに追い打ちをかけるような言葉を発した。

「あなたに情報を回したのは大きな間違いでした。よもやこのように短慮で軽率な方だとは、考えもしませんでした」

正義のノッカーズと呼ばれる者達は、エレメンツ・ネットワークという情報網で繋がっていた。そのネットワークを通じてノッカーズ犯罪の情報を共有し、蛮行にいち早く対応できるシステムを構築したのは、他ならぬアルクベインとそのサポートを行う量子コンピュータ・SPARC(スパーク)——愛称スパークィであった。

「返す言葉もありません……」

かぼそい声で、ミスティルティンは呟いた。

エレメンツ・ネットワークによりR・F(リゲイン・フローラス)の一团が日本に入国し、この日光三郎山でよからぬ策謀を張り巡らしていることを知ったミスティルティンは、連携を取って対応に当たるべしというアルクベインの指示を無視し、単身で三郎山に乗り込んだのであった。

「後は私とレイズマンが引き継ぎます」

冷然と浴びせられたアルクベインの言葉に、ミスティルティンは首を縦に振るしかなかった。

「……と、言いたいところですが、ここまでやってしまったのでは仕方ありません。全ての落とし前はミスティルティン、あなたにつけてもらうことにしましょう」

「えっ？」

予想だにしない発言に、ミスティルティンは顔を上げてアルクベインを窺(うかが)った。

「この件は、あなたに解決してもらいます」

アルクベインは念を押すように言った。

「ですが、私にはもう……」

力の源である木々は枯れ、武器である警杖は破壊された。今のミスティルティンに戦う力は残されていなかった。

「諦めるのですか？ ふっ、そのような情けない姿を見たら、あの人はなんと思われるでしょうね」

「あの人……？」

ミスティルティンは訝(いぶか)しげにアルクベインを窺(うかが)った。

「決まっていますでしょう。あなたの師、渡辺幹生(みきお)氏のことですよ」

「どっ、どうして先生のことを？」

「故(ゆえ)あって、私は様々な武術の達人と面識を持っています。神道夢想流杖術の渡辺幹生氏もその一人——」

それを聞き、ミスティルティンはアルクベインについての噂を思い出した。自分やレイズマンとは違い、アルクベインにはノッカーズ能力がない——つまり普通人(ノーマル)であった。

普通人(ノーマル)である彼がオルタレイション・バースト以前から十年以上に亘(わた)って犯罪ノッカーズと戦い続けてくることができたのは、高度な演算能力を持ち、多機能マニピュレータを操るスーパーキィの存在と共に、アルクベイン本人が多くの武術に精通していたためである。

「よいのですか？ 師の教えに従うことこそ新たな縁に繋がる、あなたはそう仰っていたでしょう。ここで諦めるということは、即(すなわ)ちその縁を捨てることに他ならないのですよ？」

アルクベインはあくまで訥々(とつとつ)と語るが、その言葉にはまごうことなき熱い思いが込められていた。

「縁……渡辺先生との……」

そしてその熱は、確かにミスティルティンの胸へと伝わっていた。

「……こんなところで、諦める訳にはいかないっ」

ミスティルティンはレイズマンの肩から身を起こし、力を振り絞って立ち上がった。

「それでこそ、正義のヒーローだぜ」

力強い言葉をかけるレイズマンを振り返り、ミスティルティンは笑みを浮かべた。

「では、私とレイズマンはあなたのサポートに回ります——おっと、そうそう。預かり物があったのを忘れていました。これをあなたに渡して欲しい、とね」

芝居がかった口調で言うと、アルクベインは懐(懐)に手を入れて何かを取り出した。

開いたその掌を見て、ミスティルティンは目を瞠(みは)った。

「それは……！」

「誰からの預かり物かは言うまでもありませんね。これが何なのかも」

手渡された小さな物を、ミスティルティンはきつく握り締めた。

ダムの上では、ザ・トレントが最後の仕上げを済ませんとしていた。

「壁に仕掛けた爆薬は解体されたか。残りの部下からも応答がない。何者かは知らんが余計なことをしてくれる」  
そう漏らし、持っていた起爆装置をダムの中へと投げ捨てた。

着水点に生じた波紋が変化し、水面に渦を描きはじめる。渦は瞬く間に大きくなり、貯えられた膨大な水の表層が激しい流れとなる。

「さすがの私も、これだけの水を操るには骨が折れるな。だが.....くくく。これでこの地の歪んだ植生は一掃され、あるべき自然の姿を取り戻すのだ」

左手に握られた小瓶の蓋を開く。ザ・トレントはゆらゆらと揺れるその内容物――枯葉剤〈エージェント・コバルト〉を激しい渦へと傾けようとした。

そのとき――鋭い刃がザ・トレントへと飛来した。

「むうっ？」

ザ・トレントは身を翻し、右手で刃を払う。

「これは.....鏢(ひょう)というやつか」

刃には平らなワイヤーが付いていた。弾かれたまま弧を描いて刃が戻った先を見やると、そこには左右非対称の仮面を被った男が立っていた。

「バランス(BALANCE)の崩れたその容貌――そうか、きさまアルクベイン(ALCBANE)だな」

アルクベインは答えず、半身となって腕を組み、ザ・トレントに向けて静かな威圧感を放った。

「爆薬を処理したのも、我が部下を倒したのもきさまか」

「.....その通り」

「私の邪魔をするつもりか。よかろう、音に聞くアルクベインが相手ならば不足はない」

ザ・トレントが右手を掲げ、渦から水柱を引き出した。

「そう急(せ)くな、ザ・トレント。おまえの相手は他にいる。因縁深いこの男がな」

「何だと？」

訝しげな色を浮かべたその目に、アルクベインの背後から現れた者の姿が映った。

「きさま.....ヒノキ・アスナ。まだ生きていたか！」

「ザ・トレント、おまえ達R・F(リゲイン・フローラス)の好きなようにはさせん」

アルクベインの前に進み出るミスティルテインであったが、その意気に反して体の疲労は色濃かった。

「くくっ。きさまは〈エージェント・コバルト〉をまともに食らった。解毒はしたようだが.....その様子から察するに、ここまで来るにもアルクベインの助けを借りたのだろうか？ この私の相手など到底できはしまい」

ミスティルテインの状態を一目で見透かし、ザ・トレントは余裕の笑みを漏らした。

「.....それはどうかな？」

そう言うと、ミスティルテインは仇敵へ手を開いた。

「む.....種、だと？」

手の中にあったのは、一粒の種だった。

「植物があれば戦える、とでも言いたいのか？ 得意げになっているところに水を差すようだが、たった一粒の種でどう戦うというのだ。私の体に埋め込むつもりか、ヒノキよ？」

「埋め込む相手はおまえじゃない！」

ミスティルテインは種ごと握り拳を作り、きつと睥(まなじり)を決した。

拳に緑色の小さな光が灯る。生命力を活性化された種が割れ、ミスティルテインの表皮に根を張った。根は掌から手の甲へ、そして手首を過ぎて肩へと伸びた。

「うぐうっ！」

異物が入り込んだことにより走る激痛に、ミスティルテインは苦悶の表情を浮かべながら耐えた。

「自らを、苗床(なえどこ)にするだと.....」



ザ・トレントの顔から余裕が消えた。

「うっぐぐううおおおおおっ！」

ミスティルテインの掌に芽が生まれ、左右に分かれながら生長していく。

ひゅん、と右腕を一振りすると、その生長はぴたりと止まった。

枝のない、つるりとした幹――否、ミスティルテインに握られていたのは、一本の杖に他ならなかった。

「宿り木(ミスティルテイン)の名の通り……というわけかっ！」

ザ・トレントは三本の水柱を作り出し、〈エージェント・コバルト〉を数滴加え、杖を構えるミスティルテインへと放った。

「神道夢想流――羽搏(はねうち)っ！」

横薙ぎ一閃、三本の水柱は四散した。

先刻に勝る力であり、〈エージェント・コバルト〉はミスティルテインの体に触れることなく弾かれた。

「な……っ？」

驚愕するザ・トレントへと、ミスティルテインは駆け出した。

生きた杖から、わずかではあるがフィトンチッドが発され、宿主に力を与えた。

ミスティルテインの黒髪に、緑の光が灯る。

「同じく――衝門(しょうもん)！」

水の壁が阻むが、捻じり込まれる突きはそれすらもたやすく貫く。

「ぐがあっ！」

右肩を砕かれ、ザ・トレントは苦鳴のうめきを漏らして片膝を着いた。

「……ううっ。ぼろ屑同然のおまえのどこに、そのような力が……」

「私には決して捨てられぬ教えがある。きさまが笑った偉大なる師の教えがな」

そう言って、ミスティルテインはザ・トレントに鼻先に杖を突きつける。

「ここまでだな」

ザ・トレントは苦汁を舐(な)めたような顔をした。

「師の教えだと……下らん。下らんぞ、ヒノキ・アスナツ！」

叫ぶや大波が立ち上り、ミスティルテインとアルクベインを押し流さんとした。

「くうっ」

「むっ」

ミスティルテインは杖をとっさに足場に突き立て、アルクベインは背のマニピュレータを使って耐えた。

無事にやり過ごしたが、大波が去った後にザ・トレントの姿はなかった。

「しまったっ！」

渦へと身を投げたザ・トレントの手には、〈エージェント・コバルト〉の小瓶がしっかりと握られていた。

ミスティルテインは杖に生命力を送り、幹を伸ばしてザ・トレントを捕まえようとした。

「今さら手を差し伸べるか……くくっ、馬鹿にするなよ、ヒノキ……」

水柱が立ち上り、ザ・トレントを一巻きして渦の中へと引きずり込んだ。

すぐさま〈エージェント・コバルト〉が渦に混じっていくのが見えた。

「ザ・トレント……いや、レイダー・オクセンシェルナ」

幾度となく死闘を繰り広げた敵の真の名を呼び、ミスティルテインは顔を歪めた。

生成されたばかりの試作品である毒を癒す術(すべ)は、おそらくなかった。

「馬っ鹿野郎……っ」

悲痛な呟きをかき消すように、轟と唸りを上げて渦が立ち上った。巨体の随所から毒の棘を生やししながら、鎌首をもたげてそのままダムを乗り越えた。それはまるで、ザ・トレントの断末魔の叫びのようだった。

「アルクベイン、奴の狙いは鉄砲水(てっぽうみず)です！」

慌てて声を発するが、アルクベインに焦りの色はなかった。

「承知の上です。だからこそ、彼を待機させたのですよ」

アルクベインが目を向けた先――三郎山の中腹で、正義の青い炎が燃え上がっていた。

「ふう、やっとこ出番かい」

大渦がダムを越えて溢れるのを見て、レイズマン・ゼロは不敵な笑みを浮かべた。

「待ちくたびれたぜ……なーんて言ってる場合じゃなさそうだな。ありゃあとんでもねえぞ」

数万トンもの水が、正(まさ)しく怒濤(どとう)となって押し寄せてくる。

レイズマンは額の輪(リング)へと意識を集中させ、高めた気力を左の巨腕へと注ぎ込んだ。

「唸れ、ゼロフィストー」

目前にまで迫った鉄砲水に向けて手を開く。

「うおおおっ、ゼロスマッシュ！」

叫ぶが早いか、掌が手首から撃ち出され、鉄砲水と正面から激突した。

「分解っ！ とにかく分解だあああああっ！」

ゼロフィストから目映(まばゆ)いばかりの光が放たれ、幅二十メートルにも及ぶ激流を触れた端から分解していく。

「くっ。とてもじゃないが、毒を選別する余裕なんかない。水を分解するだけで手一杯だっ……！」

どころか、数万トンの水を全て分解することなど、いかにレイズマンといえどもたやすくはない。

激流の大半が分解されたが、それを成すゼロフィストの黒い指先が小指から順に一つずつ消えていく。それこそがレイズマンが強大な力を駆使するために必要な弾丸——分解カプセルである。言い換えれば、その弾がなくなったとき、レイズマンの力は半減を余儀なくされるのであった。

ゼロフィストの最後の弾が、今まさに消えようとしていた。

「ちいい、保(も)たねえ。あと一押しってところなのによっ！」

レイズマンが念じると、右手の中に新たな弾が生み出された。だが、それを再装填するには、フィストを手元に戻さねばならなかった。

(こうなったら、体でぶつかるしかない——)

レイズマンは流れに向かって跳躍した。右足の下に輪(リング)が生じ、その体を宙に浮かせる。

(こっちは持続時間が短いんだが、仕方ないっ！)

親指の弾が消え、ゼロフィストが激流に押し負けた。レイズマンは手首から伸びたコードを巻き取る。フィストが戻るのと入れ替わり様(ざま)、右手に生み出した分解カプセルを前に投げる。

「ディゾルピング・キック！」

左足の裏にも輪(リング)が現れた。分解の力を込められた蹴りがカプセルにぶつかり、威力が二乗倍となって残る鉄砲水を消し去った。

「いよっしゃあっ！」

と喜ぶのも束の間、レイズマンの耳に低い地鳴りの音が響いてきた。

「ごごごご……って、まさか！」

山を見上げて呆然とした。鉄砲水が作ったばかりの道筋を、今度は土石流が下ってきていた。

地盤を支えていた根ごと森が枯れた上、そこに大量の水が染み込み、土砂崩れが起こったのである。

「山津波(やまつなみ)ってやつか」

身構えようとしたレイズマンの膝が、がくがくと震える。先ほどの蹴りに、残った全ての力をつぎ込んでしまっていたのだった。

「ここまでか。すまん、アルク……」

土石流に呑み込まれんとしたとき、その体をネットが包み、ワイヤーが流れの進路の外へ引き寄せた。

「——いいえ、充分です。やはり、あなたに頼んで正解でした」

レイズマンを救った網は、アルクベインのマントから伸びるナノスキンのマニピュレータが変形した物だった。

「おお、サンキュ……って、ミスティルティンはどうした？」

「彼は——あそこです」

マニピュレータの指が、土石流の進む先を示す。そこには、全身に緑色の光を纏ったミスティルティンが立っていた。

「い、いつの間にあんなところに？」

「投げました。あなたが蹴りを放ったときに」

「.....投げたって、おいおい」

レイズマンは呆れながら事態の趨勢(すうせい)を眺めた。

ミスティルティンは、杖の先を土石流に向けるように斜めに地面に突き立てた。あらん限りの力を注ぎ込むと、杖は地に根を張り巡らせ、瞬く間に巨大な樹木へと生長した。

斜めに真っ直ぐ伸びた太い幹から枝葉が広がり、土石流を真正面から受け止めた。

「あれは.....杉の木か」

ミスティルティンの元に向かいながら、レイズマンが呟いた。

「ただの杉ではありません。東北のとある霊山にのみ生える、千年杉と呼ばれる寿命の長い種類です」

それは、ミスティルティンの師が持っていた警杖の素材と同じ物だった。

「さっき渡した種は、その千年杉だったってことか。それにしても、一瞬であそこまでデカくするとはな.....」

「樹高三十メートルを超えています。樹齢にして三千年ほどかと――」

スパークィが驚くべき数字を告げたときには、土石流は完全に抑え込まれていた。

「よくやったな」

レイズマンが声をかけるも、ミスティルティンは右手を幹と同化させたまま首を横に振った。

「いいえ、まだです」

ミスティルティンは残された力を使い、土石流が作った道筋に千年杉の根を這わせた。

【土壌の毒物残留濃度が急激に減少していきます】

「なるほど。根から〈エージェント・コバルト〉を吸収しようというのですね」

アルクベインが得心した。

「――ですが、いかに千年杉とはいえ、〈エージェント・コバルト〉には耐えられません。当然、蓄えられた毒はそのまま残ってしまいますよ」

「はい。だから、その前に.....」

そう言いながら、右手を幹から切り離した。

「もしや、あなたは――」

ミスティルティンはこくりと頷き、レイズマンを見た。

「お願いします。この千年杉を――分解してください」

強い決意のこもった目を向けられ、レイズマンはやれやれと息を吐いた。

「.....わかったよ。たく、どいつもこいつも人をこき使ってくれるぜ。俺は産廃処理業者じゃねえっての」

こぼしながら念を凝らすと、右手に二つの分解カプセルが生まれた。それをゼロフィストの親指と人差し指の付け根から装填し、レイズマンは構えを取った。

「しかし、いいのかい？ あれはあんたのお師匠さんがくれた物なんだろう」

「構いません。あの人――先生が私だったら、きっと同じ選択をしていたはずですよ」

「そうかい」

レイズマンはふっと笑い、意識をゼロフィストに集中させた。

「――ゼロスマッシュ！」

巨腕から発される分解の力が、巨大な千年杉を毒ごと光の粒子へ変えていく。

「先生.....」

その様を、ミスティルティンは片時も目を離さずに見つめ続けた。

「.....ふう。これで正真正銘、すっからびんのからっけつだ」

レイズマンの変身が解け、つんと立った黒い髪の青年の姿に戻る。

「最初に撒(ま)かれた毒はまだ残っていますが、立ち入りを禁じれば人的被害はまずないでしょう。スパークィ、BOOTS(ブーツ)に情報を回しておいてください。後始末とザ・トレントの捜索――そのくらいのことはしてもらいましょう」

「イエス、マスター」

サポートコンピュータに指示を出すと、アルクベインはミスティルティンに顔を向けた。

「これで、何とか落ち着ですね。ご苦労様でした」

「ありがとうございます」

ミスティルティンはアルクベインとレイズマンに深々と頭を下げた。

「礼には及びません。この件の代わりに、別件であなたの力をお借りしようと思っていますから」

「別件？」

「蔵人(くらんど)公はご存じですね」

「はい。一度だけお会いしたことがあります」

蔵人とは、東京の榊町(さかきちょう)に祀られている土地神で、榊町の中に限って無敵にして万能の力を発揮する靈魂のノッカーズである。

「昨日、主立ったヒーローは榊町に来るように、との蔵人公からの召集がエレメンツ・ネットワークを通じてかけられたのです。彼が指名した中にはミスティルティン—あなたの名前もありました」

「蔵人様は、何をお考えになって召集をかけたのですか？」

ミスティルティンの問いに、アルクベインは首を横に振った。

「詳細は知らされていません。ただ一つ……気になる点があります。プロメテウス—という名を聞いたことは？」

「……確か、人類に火をもたらしたという神のことですね」

その神について、ミスティルティンは己の名付け親となった知人から聞いたことがあった。

「ここ数ヶ月の間に起きた不可解なノッカーズ犯罪の共通点として、プロメテウスを名乗る者の影が浮かび上がりました」

「蔵人様がヒーロー達を集めようとなさっているのは、そのプロメテウスと戦うためだと？」

「それもわかりません。ですが、類推するに、今回の召集にはその者が大きく関わってくるものとは考えています」

アルクベインは冷静に言うが、その奥には微かな緊張があった。

それを察し、ミスティルティンは想像もつかないほどの大きな戦いが起こる予感をひしと覚えた。

「……私も、その召集に応じろと言うのですね」

「ええ。今回のことを貸しとお思いになるのならば、それを返す良い機会かと」

回りくどい言い回しを聞き、ミスティルティンはようやくアルクベインという男の気難しさと魅力を理解できた。

「……ふふ、わかりました。私も行きましょう」

微笑みながら、手を差し出す。アルクベインはわずかに逡巡した様子を見せたが、腕組みを解いてそれに応じた。

「もちろん、俺も行くぜ」

握り合わさった二つの手の上に、レイズマンが手を乗せた。

「レイズ・アッパー—だな」

新たに生まれた三人の絆を讃えるように、東の空から朝日が昇る。

「—では、私達は先に榊町へ向かうことにします」

「じゃあな、ミスティルティン」

そう言い残し、アルクベインとレイズマンは陽光の中に消えた。

二人の背を見送るミスティルティンの胸に、不安がよぎる。

「プロメテウス—火を与えた神か」

植物を操る己にとって相性の悪い敵であろうことは、容易に察せられた。

「……それでも、逃げるわけにはいかない。私の力は人を護るためのもの—」

右手に宿っていた千年杉の感触を確かめるように、ミスティルティンは拳を固く握った。

「そうですよね、渡辺先生」

どこかで見守っていてくれるであろう師を思い、誓いを新たにするのであった。

## ミスティルテイン

<http://p.booklog.jp/book/1539>

著者 : sasagani

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/1539>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/1539>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.